戦争と平和の資料館
# ピースあいちニュース
第22号
2016年3月10日発行
〒465-0091
愛知県名古屋市名東区
よもぎ台2丁目820
電話・FAX 052-602-4222
発行:戦争と平和の資料館ピースあいち　http://peace-aichi.com/　【定価:30円】

## 「原爆の図」ふたたび

**ピースあいち特別企画 丸木位里・丸木俊原爆の図展**
**開催期間　2016年3月15日(火)～5月7日(土)**
**休館日：日曜日、月曜日**
**期間中特別開館　3月20日(日)・4月17日(日)**
**開場時間　午前11時～午後4時**

丸木位里・丸木俊夫妻の共同制作による原爆の図15作は、被爆直後に広島市に救援活動に入った夫妻が実際に見た光景をもとに、32年間にわたって描いたものです。最初の作品が誕生したのは1950年。敗戦後、まだ日本が占領軍の支配下におかれていた時代でした。

「ピースあいち」では開館5周年の2012年の夏に、原爆の図丸木美術館の協力を得て、第5部《少年少女》(1951年)と第12部《とうろう流し》(1968年)の展示会を開催しました。愛知においては普段観ることのできない原爆の図ですので、多くの方々の来館をいただき好評を得ました。

それから4年、ふたたび原爆の図展を開催いたします。今回は第4部《虹》(1951年)と第8部《救出》(1954年)です。

原爆投下直後の様子を描いた《虹》。左側には傷ついた兵士たちの群像。全裸のからだに軍靴と剣だけをつけた兵隊。手を折り、足をつぶした若い兵隊。病兵は破れた皮膚に毛布をかぶってさまよっています。日本にとらわれていたアメリカの2人の兵士が手錠をはめられたまま、路上に倒れています。右側には暗闇の中で暴れる青白い顔色の馬。虹は暗い空にかすかに描かれています。昼なのか夜なのか。原爆の図になぜ虹なのでしょうか。

広島での救援活動が描かれた《救出》。丸木位里さんは故郷の広島に原爆が落とされ大きな被害を受けたことを知ると、当時住んでいた東京から広島に向かい、しばらくして俊さんも広島に入りました。位里さんの親族も被爆しましたので、救援活動を行いました。「いつまでも火は燃えつづけていました」「救出がはじまったのはしばらくしてからのことです」とあります(図録より)。原爆後の救援活動とはどんなものだったのでしょうか。

今回は熱気あふれる夏ではなく、穏やかな季節の春に開催します。作品とゆっくりと向き合っていただきたいと願っています。今回の展示会が首尾よく開催できれば、今後数年かけて原爆の図全作品(第15部「長崎」を除く)を「ピースあいち」で展示する予定です。

- 展示作品　原爆の図第4部《虹》(屏風四曲一双、縦1.8m×横7.2m、1951年)
  原爆の図第8部《救出》(屏風四曲一双、縦1.8m×横7.2m、1954年)
- 会　　場　ピースあいち3階展示室
- 入 場 料　当日券　大人1,000円　小中高校生400円
  前売券　大人800円　小中高校生300円
  ※入館料を含む。
  ※バス・地下鉄ドニチエコきっぷ・1日乗車券は大人50円引き、小中高生20円引き

### 関連イベント

**●丸木美術館学芸員による ギャラリートーク**

2016年3月20日(日)
13:30～15:00
丸木美術館学芸員　岡村幸宣さん
**【参加無料】**(＊入館料は必要です。)

**●『やわらかい はだ』 アーサー・ビナード 自作紙芝居の上演と講演会**

2016年4月17日(日)
13:30～15:30
**【参加費】**大人1,000円 小中高生500円
※入館料や原爆の図展チケットとは別に必要です。

## これからの催し

### 「民間戦没船と船員の記録」展

**開催期間　7月5日（火）～7月15日（金）**

本年1月29日、日本海員組合は政府・防衛省が計画する民間船員を予備自衛官補とすることに断固反対する緊急声明を発表しました。また昨年12月、天皇は誕生日の言葉の中で、太平洋戦争中の徴用船について言及しました。こうした発言は太平洋戦争における民間船と船員の膨大な犠牲をもとにされました。

「ピースあいち」でも、昨年に引き続き「民間戦没船と船員の記録」展を、「戦没船を記録する会」協賛で開催します。戦後71年、民間船が再び戦火の海に引き出されるかもしれない時代だからこそ、多くの人に知っていただきたいと思っています。戦没船に関する証言や資料も募集中です。6月11日まで「ピースあいち」で受け付けています。

昨年の展示から

### 2016沖縄展
### ―辺野古から沖縄・日本を考える

**開催期間　5月24日（火）～7月2日（土）**

かつて戦いの場であった沖縄は、今日また大きな闘いのなかにあります。辺野古に造られようとしている巨大な米軍基地に対して、沖縄の人たちが「NO」を掲げて強く闘っています。「ピースあいち」は、沖縄の平和を願い、連帯の思いを込めて、今年は辺野古問題に焦点をあてた沖縄展を開催します。

この展覧会は、「辺野古問題ってなに？」から始まり、戦後の沖縄の米軍基地のありよう、日米地位協定の問題、沖縄の経済、さらには琉球王朝の時代から薩摩の侵攻、明治の「琉球処分」、沖縄戦にいたるまで沖縄の歴史を遡り、この問題の本質に迫ろうとする企画です。

キャンプシュワブ前

私たちはこの展覧会を通して、米軍基地の74%が集中している沖縄のこと、その沖縄が今またどのような苦難に向き合っているかを多くの人に知っていただき、改めて「日本のなかの沖縄」を共に考えたいと思います。多くの方のご来館をお持ちしています。

### 私の八月十五日展
### ―漫画家・戦争体験者たちのあの日の記憶

**開催期間　7月19日（火）～8月31日（水）**

夏の企画展、今年は、水木しげるさんや赤塚不二夫さんなど戦争を体験した漫画家たちが絵と文で綴った「私の八月十五日」展です。この展示作品は20年以上も前に本として出版され、その後、高倉健さん、山田洋次さんなど著名人が加わって一つの運動になり、作品の多くがパネル化されてあちこちで展覧会が行われてきました。今年は、その作品約35点をお借りして、「ピースあいち」で展覧会を開催できることになりました。あの戦争の悲劇を二度と繰り返さないという思いを伝え続けてきた漫画家や著名人の証言と絵は素晴らしいものばかりです。どうぞご期待ください。なお、この展覧会にちなんで「私の八月十五日」の証言を募集します。ぜひ応募してください。

「助かった」水木しげる

**『私の8月15日』証言・募集**

【募集要項】

内容：自分の体験や家族・友人などから伝えられた「8月15日」のこと

字数：本文400字以内。お名前、当時（1945年8月15日）の年齢・住んでいた場所を書き添えてください。

締め切り：2016年5月末まで

＊絵や写真を添えていただくことも大歓迎です。

送り先（連絡先）：戦争と平和の資料館ピースあいち

※応募作品は、戦争体験の証言として、展示などに活用させていただきます。

報告

# 戦争の記憶を伝えたい―「戦後70年　応募資料・作品展」

2015年12月8日（火）～2016年1月16日（土）

先の戦争を知らない世代が国民の半数を超えました。アジア・太平洋戦争の記憶は薄れるばかりです。その記憶を次世代に伝えるため、「ピースあいち」では戦時に使われた戦時資料をはじめ、戦争体験の記録や「戦争と平和」をテーマとする文芸作品を募集しました。150人の方々から500点余の品々が寄せられました。

戦時遺品（実物資料）の中には、貴重なものが幾つかありました。その一つが矢作製鉄所の工場内に落ちていた伝単（宣伝ビラ）です。見出しには「日本に対し戦争終結を提議、荒廃か平和か決断の時到る」とあります。その内容は、「ポツダム宣言」の全文13条が日本語で記されています。この他、戦争体験記・体験画、聞き取りレポート・絵画、戦争と平和の文芸作品がぎっしり展示されていました。

## ●平和を願って木の葉が語る

企画展の展示室入り口では、緑色で木の葉の形のメモ用紙を来館者に手渡しました。そして、出口の手前の壁面には、広島で被曝したアオギリの木が描かれました。開幕当初は裸木でしたが、見学を済ませた方々が感想を綴って、木の枝に貼り付けていきました。

閉幕頃には葉が茂って日陰をつくるほどになりました。風が吹くと葉擦れの音がしました。それは葉っぱの平和を願う呟きの声でした。その声を書き留めました。

＊　どのようにして戦争が始まってしまうのでしょうか。戦争をしたい一握りの人間が巧みなプロパガンダで周りを黙らせ、気づいた時には、戦争が始まっているのでしょう。始まってしまったものは止めるに止められず、泥沼の深みに・・・・。私たちは賢くあらねばならないと思います。「嫌なものは嫌!」と言い通さねば・・・。

＊　平和をつくることの難しさを知りました。でも平和づくりをあきらめない！

＊　アオギリは、戦後のニホンをじっと見守ってきた。今こそ、戦争の惨状を繰り返さぬように！

＊　私は8月6日に生まれ、子どもの頃から戦争と平和に興味をもってきました。様々な資料館を見てきましたが、ピースあいちは色々な目線からしっかり戦争というものを見る事ができ、更に自分の中で考える事ができました。

＊　戦争を知らない世代ですが、親からみじめな暮らしや空襲の恐ろしさを聞きました。二度とそんな時代が来ないように願っています。

＊　思い出す事も苦しい戦争体験を文字にしてまとめてくださった方々、そうして、その方々のおもいを展示してくださったボランティアの方々、すばらしい活動全てに感謝をしたいです。「ありがとうございます。」

●関連企画

## 「話そうよ!戦争のこと・平和のこと」

2015年12月12日（土）

「戦争の記憶」に応募いただいた方々に参加していただきました。

体験談を寄せていただいた方からは、「戦争のことは人に話してはいけないと思っていた。家族にも話してこなかった。」「喜寿を記念して家族が祝ってくれた折、憲法を守り平和を貫いてくれるよう、初めて戦争体験を語る手紙を書いた。」「父の遺品を整理していたらシベリアでの抑留生活をつづった原稿が出てきた。父は戦争のことシベリアのことはほとんど語らなかった。」など、戦後70年を機に「語る」ことへの思いが話されました。

展示に携わったボランティアからは「たくさんご応募いただき、資料→体験談→聞き取りレポート→平和の作品へと、展示をしてみると、戦争の実相を伝えたい！どうやって伝え続けていくのか！一つの流れが見えてきたように思う」と。また、参加した来館者からは、「お話を聞いていて戦死した叔父のこと、子どもや孫に伝えていこうと思いました」との感想が寄せられました。

# 平和へのメッセージ

安倍政権は「憲法を変える」と言いだしました。参院選で改憲を問い、3分の2の改憲に賛成する議員を集め、一挙に改憲に突き進もうとしています。昨年の戦争法案の可決で、実質的には現憲法は骨抜きになっていますが、でも、前文と9条は安倍政権の足枷になっています。私たちは世界の英知を結集してつくられた憲法の理想を実現するための運動をやめるわけにはいけません。

こんな状況の中で、若い世代から熟年世代までの方々に「平和についての思い」を寄せていただきました。

## 他者を傷つけての平和は、平和ではない

池住　義憲
（元立教大学大学院キリスト教学研究科特任教授）

「ジャストピース」（JUSTPEACE）という言葉がある。ジャストピースのジャスト（JUST）は、「公正・正義」。「公正にもとづいた平和」という意味。自分たちの地域だけの公正・正義でなく、他の地域・社会・国の公正・正義も含むということ。ある人・ある地域を犠牲にして成り立っている“平和”は、ジャストピースとは呼ばない。

米軍基地/施設の74%を国土面積0.6%の沖縄に押しつけて成り立っている日本の“平和”と“繁栄”と“安全”は、ジャストピースではない。日本が犯した植民地支配と侵略戦争の歴史事実を真摯に受け止めず、「子どもたちに謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」と言って問題の幕引きを図った安倍首相の70年談話（2015年8月）によって近隣諸国の人たちを傷つけ続けている限り、ジャストピースは到来しない。安倍政権が立憲主義・平和主義を破壊して強行成立させた安保関連法（戦争法制）を廃止することなしに、ジャストピースは到来しない。

私たちはこれまで、ジャストピースを壊してきてはいないか。今も壊し続けてはいないか。その上で、「平和、平和!」と叫んではいないか。どのようにして、他者を傷つけず、「公正と正義を伴う平和」すなわちジャストピースを創っていくか。志を同じくする多くの仲間と共に歩みを進めていきたい。

---

## 「みるく世がやゆら」（平和でしょうか）

山下　律子
（あいち沖縄会議）

昨年沖縄県平和祈念資料館の平和メッセージ展で入賞した知念君のこの言葉が、私にも問いかける。沖縄の状況を知らなかった頃の私は、日本は憲法9条に守られた平和な国だと信じていたが、それは沖縄の犠牲の上にある幻想に過ぎなかった。

敗戦後の沖縄は、日本の主権回復と引き換えに27年間にわたり米軍の施政権下に置かれ、県民は土地を強制接収され、人権を蹂躙された。復帰後も日本の安全保障のために基地機能強化が図られ、現在も在日米軍施設の74%を押し付けられている。県民はこの間、米軍による環境破壊、繰り返される事件、事故の被害に喘いでいる。そしてさらに今、安倍政権は県民の80%が反対しているのにも拘らず、民意を一顧だにせず、辺野古に最新鋭の米軍基地建設を強行しようとしている。

「国民は、ひとしく平和のうちに生存する権利を有する」はずである。しかし、私たちは命を脅かす危険な基地をずっと沖縄に押し付け続けている。沖縄から基地を無くさなければ平和な国とは言えない。沖縄県民の「これ以上基地は要らない」の声を尊重しなければ民主主義の国とは言えない。「平和」は、私たち自身が人権意識を持ち、主権者として情報をキャッチし行動することによって作っていくものだと思う。戦争につながる基地はどこにもいらない！先ずは辺野古の新基地建設阻止に向けて行動しよう！

## この道の先の平和

下方　映子
（ピースあいち正会員）

まもなく「ピースあいち」に『原爆の図』がやって来ます。新しく多くの方々が、この絵と出会いに来て下さるでしょう。

私にとっての『原爆の図』展はずっと昔の記憶の中。30年前に旧愛知県美術館で行われたものです。私の母である館長野間美喜子や事務局長の宮原大輔さんたちは、この展覧会に必死で取り組んでいました。大学生だった私はその姿を見て、この人たちはなぜここまで『戦争』に拘るのだろうか？と不思議な気持ちがしていました。平和な時代に生まれて青春まっただ中だった私には、戦争など「所詮終わった遠い過去」でした。

それから長い月日が流れ、あの日が訪れます。
震災と原発事故。このまま国が滅びて難民になってしまうのでは、と心の底から恐怖しました。国は情報を隠し、幾重にも国民を騙しました。私はその時初めて分かったのです。これは戦争と同じだ。あの戦争を学ばないと何度でも騙され、次の戦争を防ぐことができないのだ。母たちが「ピースあいち」をつくったのは、こういうことだったのだと。

この春、息子が高校を卒業し、原爆の図展当時の私と同じ年頃になりました。嬉しいはずの春なのに、この道の先も平和だよと、もはや誰も言えなくなってしまったことに心が沈みます。しかし私は、あの時の母たちを思い出し、自分なりの闘い方で平和を求め続けます。

---

## 武力で平和は構築できない

久保田　隆政
（ピースあいち正会員）

平和とはどのような状態の事を言うのだろうか。

平和とはあらゆる戦争や紛争はもちろん、偏見・差別が無く、人類がごく当たり前の生活ができる社会の状態の事を言う。しかし今の世界情勢はどうだろうか。国家間の対立、外交交渉（外交）の決裂などによる戦争や紛争が絶えず、空爆などで市民は生命や生活が脅かされ、塗炭の苦しみに苛まれているのが現状だ。

日本も平和主義国家としての運営が危ぶまれている。安倍政権の暴走によって特定秘密保護法や集団的自衛権の行使容認が成立し、昨年9月には安全保障関連法案（安保法案）が衆議院の予算委員会で可決した。その行き着く先は憲法改悪だ。つまり安倍政権は、日本を「戦争のできる国」に変えようとしているのだ。日本が戦争を行うようになれば、日本国民の生命や平和な生活はいとも簡単に崩れ去ってしまう。武力では平和は築くことはできない。その事はこれまでの歴史が証明している。

平和を守る事は「日常」を守ることに繋がる。今の「日常」を守るために各国との緊張状態を外交で解きほぐし、友好関係を築くことこそ平和への道筋といえる。

---

## 「選択」から「主権行使」へ

加藤　雅章
（第9条の会なごや事務局）

今私たちは戦後最大の危機に立っています。それは安倍政権が平和憲法を壊し、「戦争する国・日本」をつくろうとしているからです。それにもかかわらず支持率が下がっていないからです。

戦後、労働運動や反戦平和の運動が憲法改悪の危機を何度も救ってきました。私もその中で多少は頑張ってきたつもりです。しかし今や労働運動は力を喪失し、連合の中心に君臨している大企業労働組合の幹部の多くが憲法「改正」に賛成していて、反戦平和のたたかいを敵視しています。また選挙のたびに各政党がバラ色の政策を宣伝し投票を促し、主権者である私たちは、その中から「選択」し“お任せします”と投票する「お任せ民主主義」が進行し、市民の政治への当事者感覚が奪われ、バラバラにされています。このような現状において、圧倒的な物量を持つ権力に立ち向かうにはどうしたらいいのか、私は悩んできました。

昨年の戦争法反対のたたかいに多くの人が起ちあがり、組織の力を示した労働組合のたたかいもありました。そしてこの力は安倍政権を追い詰めてきました。これこそが「主権行使」だと私は確信しました。参議院選も大事なたたかいです。けれども盛り上がったたたかいを分断する結果を招きかねません。なによりも私たちが周りの人に「安倍政治」をしっかり考えてもらい、これを許さない運動の担い手になるよう呼び掛けたいと思います。

## 報告 「おざわゆき『あとかたの街』が描いた名古屋大空襲」展

2月23日（火）～3月12日（土）

名古屋出身の漫画家おざわゆきさんが、お母さんの戦争体験を描いた『あとかたの街』全5巻完結を記念してパネル展が開催されました。マンガは12歳の少女の目線で見た戦時下の名古屋の暮らしから始まり、大空襲下の人々の様子がリアルに描かれています。作者のおざわゆきさんはお母さんの個人的な体験だけでなく、多くの体験を取材し、地上で何が起こっていたのか克明に描いています。

また米軍資料を調べ、上空の作戦の意図にも目を向けています。3月12日の名古屋市街地焼夷空襲は3月10日の東京大空襲に続けて行われた電撃焼夷作戦のひとつでした。名古屋の後は大阪、神戸と続きました。米軍はM69焼夷弾が不足する中で他の焼夷弾をかき集めて3月19日再び名古屋を空襲します。その結果、名古屋の中心部は焼け野原となります。

『あとかたの街』を通じて身近な地域であった戦争の事実を伝えることは大事なことだと思いました。

## 「震災から5年ー福島と原発」展

2月23日（火）～3月12日（土）

2011年3月11日の東日本大震災・福島原発事故から5年経った今も、故郷に帰れない10万人以上の人々がいます。原発の再稼働が進む今、改めて原発について考えようと、事故の惨状と5年後の現状、そしてチェルノブイリ原発事故の教訓などを写真やパネル約40点にまとめて展示しました。展示物作成にあたっては、「チェルノブイリ救援・中部」の全面的なご協力をいただきました。

## 企画展「戦争の中の子どもたち」

1月19日（火）～2月20日（土）

当館には小学生、中学生が学校からの団体見学で来館されています。このため、当館は、「戦争の中の子どもたち」という企画展を準常設展の形で、年間随時開催しています。

戦争がはじまれば、若者は戦場に送られ、国民は苛酷な暮らしを強いられます。先の15年戦争時、子どもたちは軍国教育を受け、戦争に協力させられました。中学生や女学生は勤労動員で、軍需工場で働きました。都会に住む子どもたちは集団で田舎に疎開しました。

戦争が終わって70年余、戦争の記憶が薄れる中、当時の教科書、子どもたちの遊び、玩具、紙芝居、替え歌など様々な戦時遺品と切り口で子どもたちの暮らしを振り返った展示でした。

### 「第31回戦災・空襲記録づくり東海交流会」開く

2015年12月13日（日）

東海交流会が「ピースあいち」で開かれました。豊橋からは、空襲犠牲者氏名の名簿が新たに発見され、犠牲者氏名はこれまでの判明分300人から約2倍の611人になったことが報告されました。そのほかに、戦争体験を若い人へ語り継ぐピースあいちの活動について、また県・市が新たに開館した資料館の現状などの報告がありました。各地から14団体が発言、参加は18団体・個人合計45人でした。

## 報告 森本瑞生写真展「戦争を見つめた目」

2015年12月9日（水）～2016年1月16日（土）

モノクロの陰影が印象的な8人の戦争体験者のポートレートと、体験をまとめた冊子をプチギャラリーに展示しました。撮影したのは名古屋学芸大学映像メディア学科3年生・森本瑞生さん。

制作の動機は、「戦後70年に安全保障関連法案が可決され、今まであまり考えなかった戦争が急に身近なことに感じられ、教科書に載っていない当時の状況や心情を知りたいと思ったから」と。若い感性が写した戦争を見つめた目は、静かに語りかけてくるように感じられました。

## 戦後70年　天野鎮雄が読む
### －村上春樹著『辺境・近境』から「ノモンハンの鉄の墓場」

2015年12月12日（土）

小学生の頃からノモンハン事件（1939年にあった満州駐屯の日本軍とソビエト・モンゴル人民共和国連合軍との満州国国境を巡る激しい戦争）に興味を持っていた村上春樹が、2週間かけてノモンハンを旅した旅行記。

「ずっと読みたかった」という天野さんが、65頁の作品を1時間に短縮して朗読しました。2万人の兵士がどのような場所で、どのように死んでいったのか。それは本当に、もう終わった昔の話なのか―。天野さんの熱演で、満席の来場者が、過去と現在を見つめる村上春樹の世界に引き込まれていきました。

天野鎮雄さん

## 「三ヶ根山と豊橋戦争遺跡巡り」バスツアー

1月31日（日）

好天に恵まれ、8時半に27名が地下鉄一社駅前を出発。幹事さんの行程説明を聞きながら10：00頃、三河湾を望む三ヶ根山頂に到着。「殉国七士廟」「比島観音」などを見学し、蒲郡ラグーナテンボス「花ごよみ」の麺定食で午後にそなえました。

豊橋では伊藤厚史（名市教委学芸員）さんの案内で、愛知大学構内の「第15師団司令部」や、豊橋公園の「歩兵第十八聯隊之址」碑などを訪ねました。帰りは東名高速を経て18時過ぎ一社駅前に無事帰着、スタッフに感謝し家路につきました。

愛知大学

## ピースあいち・映像による学習会

- 毎月第2土曜日　午後4時30分～　入場無料
- 11月14日『ハーツ・アンド・マインズ』（1974年作品）
- 1月　9日『チャップリン・独裁者』（1940年作品）
- 2月13日『無防備都市』（1950年作品）

この上映会の作品は、上映時間を2時間以内であることを条件に選定しています。1月9日に上映した『チャップリン・独裁者』は上映時間126分でしたが、戦争に向かって暴走する現政権に重ね合わせてみてほしいとの思いで選定しました。ラスト6分のヒトラーらしきチャップリンの演説は、台頭するヒトラー政権を危惧したチャップリンが全世界の人々に伝えたかったことでした。今こそ見てほしい名作です。

資料館探訪 15

## 少女たちの鎮魂の資料館――ひめゆり平和祈念資料館

ひめゆり平和祈念資料館は看護要員として戦場に動員され、死んでいったひめゆり学徒隊の資料館として、ひめゆりの塔のすぐ隣に建設されました。塔はひめゆり学徒隊の最後の地である外科壕（ガマ）の上に建てられた慰霊碑です。

資料館は1989年6月23日に開館しました。そこにはひめゆり学徒隊犠牲者の遺影や遺品・生存者の証言集・証言映像と陸軍病院壕の一部や伊原第三外科壕内部を再現したジオラマなどを見ることができます。写真や証言集を読んでいると、少女たちの思いが伝わってきます。資料館の掲示に「太陽の下で大手を振って歩きたい　水が飲みたい・水・水　お母さん・お母さん」と書かれていました。彼女たちは母親を必要とする年代であったのだと思うと切なくなります。「もっと生きたかったろうに。夢もあったろうに」。

ひめゆりの塔

慰霊碑　ひめゆり学徒隊の戦没者名が刻まれている。

少し前までは生存者たちが「語り部」として体験を話しておられたそうですが、皆、高齢者になられ、現在では証言ビデオで視聴ができるようになっています。

（N）

月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン（無料）」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください！

## ぜひ「ピースあいち」の会員に！

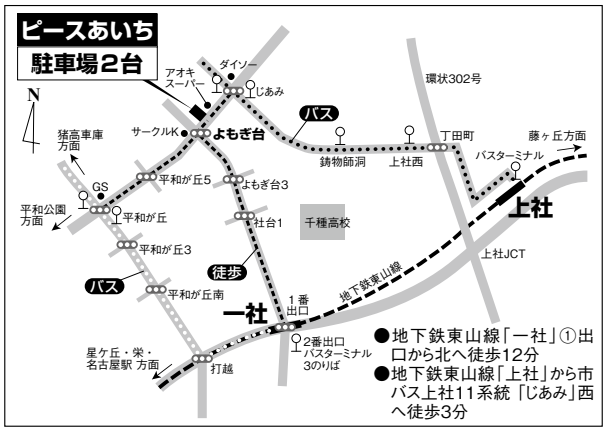
「ピースあいち」の基本財源は、入館料（大人300円・子ども100円）と会員の皆さんの年会費（正会員6000円・賛助会員3000円）です。来館者数は、開館した2007年は約12000人、以後は6000人前後で推移してきました。今年度は、戦後70年の節目でもあり、企画展やイベントに力を入れ、12月末で約7000人と開館以来2番目の来館者数となりました。

しかし、「ピースあいち」の安定した運営のためには、会員の拡大が重要です。現在会員数は984名（正会員353名・賛助会員631名）ですが、「ピースあいち」の年間経費約1000万円には大きく足りません。不足分は不確定な寄付金や助成金に頼って運営しています。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。ぜひ多くの方に会員になっていただき「ピースあいち」を支えてくださいますよう、お願い致します。

## 【ピースあいちの利用案内】

- 開 館 日　火曜日～土曜日
- 開館時間　午前11時～午後４時
- 休 館 日　日曜日・月曜日・年末年始
- 入 館 料　大人 300円　小中高生 100円
- 2階の常設展示室のほか、1階の「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示。ほかにも準常設展示として「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります（300円）。他に障がい者用が1台分あります（無料）。

## ■「ピースあいち」への交通のご案内




### ●編集後記●

大阪の作家・織田作之助の小説「夜の構図」は章立てである。ある章は若い二人が口づけをしたところで終わっている。次の章は「口づけは続いていた」で始まる。昨今の政治状況は、これに似ている。昨年は戦争の不安を抱えたまま終えた。年が変わっても、その不安は続いている。

60年安保闘争時、国会議事堂を取り巻いたデモは主として労組や全学連という組織による「動員」だった。ところが、昨年、国会議事堂を取り巻いたのは、「シールズ」の若者たちや「ママの会」など個人の「意志」であった。平和運動に携わる私たちにとって心強い存在だ。

いまこそ、一人ひとりが声をあげることが肝要だ。その一端をこの『ニュース』が担いたい。（S）